

宝塚第一小学校教育環境適正化検討委員会
第4回 会議概要

開催日時	令和5年(2023年)10月19日(木) 10:00~11:40
開催場所	宝塚第一小学校 視聴覚室
出席者	【委員】14名 【教育委員会事務局】5名
次第・議事	1 開会 2 報告 通学区域の弾力的運用について(経過報告) 3 議題 学校規模適正化の手法について 4 閉会
会議の主な結果	・宝塚第一小学校区において人口の急増を招いたのは、開発抑制策をとらなかったことが原因である。 ・校区変更については、すぐに検討するのではなく、通学区域の弾力的運用の在校生の結果を見ながら検討していく。 ・保護者説明会については、次回以降の検討委員会で開催時期等も含めて議論していく。
会議録(要旨)	
事務局	【1 開会】 【2 報告】 それでは事務局から宝塚第一小学校における通学区域の弾力的運用について経過を報告する。〈資料1の説明〉 今後の予定として、次に在校生向けの就学学校変更の意向調査を実施する予定。新小学校1年生の時は、就学学校の変更を希望するかどうかしか聞いていなかったが、在校生向けに意向調査を実施する時は、なぜ就学学校を変更するのか等の理由も聞いていこうと考えている。追加するアンケート項目について、ご意見があれば、参考にさせてもらう。 ～意見なし～
副委員長	今回の結果を受けて、事務局はどう評価するか。
事務局	事前に意向調査、事前調査ができていないので、予想していたよりは少ない。しかし、宝塚第一小学校以外に行きたいという方に関しても、他の学校に行けるという選択肢ができたことや、宝塚第一小学校が抱えている問題を他の保護者の方にも周知できたと考えている。
委員	在校生に対する調査について、期間を教えてください。
事務局	来週中ぐらいの発送を目途に、期限は11月14日ぐらいを考えている。というのも、育成会の手続きや特別支援学級の手続き等で、11月14日以降になると、日程的に厳しくなる。ただ、保護者の方に検討していただく時間を十分に設けたいので、3週間ぐら

	い設ける予定にしている。
委員	2 つほど質問がある。この 99 名の中には私学の小学校に行く方もいると思うが、この時点では、そういう方を除いているということか。
事務局	意向調査と合わせて、国立・私立を希望される方には別のフォームで回答してくださいと言っている。 ただ、99 名の中からも私立に行く方がいるかもしれない。まだ試験、願書すらも時期ではなく、回答者がどういう意向で回答したのかは聞いていないので、そこは少し不明である。当然、西山小学校、末広小学校に行かれる方も、もしかしたら私学に行くという方もいるかもしれない。そうしたこともあったので、在校生については変更する理由を聞いていきたいと思っている。次回以降はしっかりと調査をしていきたい。
委員	校区の中で私学を希望されている方は何人ぐらいいるのか。
事務局	今までの状況から言うと、宝塚市内で就学前から（私立）小学校に行く方は平均して 5%、小学校から（私立）中学校に行く方は、就学前から（私立）小学校に行かれる方も含めて 20% ぐらい。宝塚第一小学校区は比較的宝塚市内でも私学に進学する方が多い方で、平均より少し高い水準と思う。
委員	もう 1 つの質問は、近くの小学校のお子さんを持つ親御さんが一番心配と言っていたのが、例えば、末広小学校に行くとなった時、集団登校でなければ、保護者が送り迎えするということだが、小学校までの送り迎えについて、教育委員会からどういう説明をしたのか。
事務局	説明会でも登校班の話はあった。最寄の登校班まで保護者の責任の下で通うことになるが、実際にどこの登校班になるかは、就学校と調整してくださいということで説明している。
委員	前に聞いた際には、保護者の責任で新しい小学校まで通学するという説明だったと思う。毎日保護者がついていくのはなかなか難しく、宝塚第一小学校であれば今まで通り行けるからという意見もあった。
事務局	ありがとうございます。
委員	対象者が 182 人で調査結果が 99 人、残りの人は、調査していないということか。
事務局	83 名の方は未回答者になる。

委員	全員に案内はしているということか。
事務局	郵送で送っている。
委員	在校生向けへの意向調査について、できれば保護者に出る前に、職員に周知したいので、事前に文書をいただきたい。それと、アンケートを集計したものも開示いただいて、誰がどんな回答をしたのかも職員に周知したい。
事務局	承知しました。
委員	調査中に質問等の対応はしっかりしてもらえるのか。
事務局	新小学校 1 年生に対する意向調査をした時、登下校する場所がどこになるのかという問合せを何件か受けた。その際には該当する、例えば、西山小学校を希望する方であれば、その方の自宅から一番近い登下校する場所を学校から聞いてお伝えするなどの対応をした。また、育成会の申請が間に合うかどうかについての心配事もあり、11 月 13 日から 12 月 15 日に、新 1 年生から 3 年生を対象に一次申請がある旨案内させていただくなど、電話やメールでいただいた質問にはすぐに対応している。 在学年に対する意向調査の時も、宝塚第一小学校以外の小学校についても知りたいという保護者からのご意見もあると思うので、例えば、二次元コードですぐにホームページが見れたり、育成会の案内も在学年の意向調査のアンケートに二次元コードを入れたりする等、新 1 年生の意向調査でもらったご意見を参考に、在学年にはより丁寧なアンケートを送ろうと思っている。もし在学年へ意向調査をとった際に質問があれば、すぐに教育委員会として対応する。
委員	色々なところに問合せがあると大変だと思うので、調査の用紙に問合せ先をきちんと載せてもらえればと思う。
事務局	ありがとうございます。
副委員長	他にこの宝塚第一小学校以外の学校を選んだ 6 人の評価はどうか。個人的に思うのは、10 年前に学校選択制をしていたら、10 年の間に 60 人の子どもたちが他の学校を選んでいたらかもしれないということ。つまり、約 2 クラスがこの学校からなかったということ。私学への進学率 5% という数字と、選択制の 6/182、3% が選ぶということは、約 8% の人が、うまくアナウンスをすれば学校選択制で他校を選択する可能性があったということ認識してほしい。つまり、しっかりと防げる可能性があったということなので、その辺の数字の分析をしっかりした上で、この学校選択制をどう運用していくのかを、教育委員会としてしっかり取り組んでもらいたい。
委員長	今の意見について、初めてこういう問題提起ができてこの結果が出た。実は、市のデ

	一タによると、2004 年と 2022 年の宝塚第一小校区に住んでいる児童、私学も全部混みで比べると 34%、つまり 300 人増えている。これは学校の問題というより地域の問題で、ここに住む人がどんどん増えている。おそらく子育て層が新しく入ってきてこういう状況になっている。今回の父兄説明会において、この過大校というのは異常値だということを提起できたので、今度は保護者に選択をしてもらうようなステージに変わってきた。だから、保護者の意向というのはこれから尊重しないといけない。これについては反対だという意見があれば、ではどうすればいいか回答をもらって、真剣に取り組んでいかないとけない。実際問題として確実に増えるということを考えると、時間を急ぐことと、それから今まで以上に議論を尽くしていく必要がある。
副委員長	会長から言ってもらったが、今のところそれでよろしいか。
委員	次に入る前に、教育委員会の人はタカミ マサルさんをご存じか。 昭和 53 年の教育長さん。この昭和 53 年に中州自治会の住人が 979 票の署名をもって陳情している。伊子志小学校ができることによって、子弟の一部がその中に含まれるのかもしれないという不安があり、人口流入で児童数が過密になったとの理由で他校への転入は納得できませんということ。今と一緒に、この時からこの陳情をもし読んでいれば、あなた方は 45 年の間に手を打てたと思う。この 45 年間に何をしたかを聞きたい。私は自治会員に対して説明をしないとけない。質問されてなぜ了解したのかということになると、私が説得する立場になる。 それから、宝塚第一小学校は距離からいっても最短で、特に支多々川と逆瀬川の間にあって、児童達の通学に至極便利で、安全であるということを言っている。だから伊子志小学校に行きたくないということを言っていて、このあたりも今と一緒に。
委員長	今の数字について、この昭和 53 年というのは 2 度目のピークで、1,352 人というのが当時の宝塚第一小学校の人数。一番のピークが昭和 42 年で 1,597 名、これが最大のピークで、平成 11 年に 650 人に減っている。このあたりでこの新しい校舎が建った。そして、震災後、特に温泉街の保養所や温泉旅館の跡地にマンションが急増し、人口急増になったという都市計画的な問題がはらんでおり、教育委員会の問題というよりも、むしろ市の開発規制の緩和に問題があったと思う。
委員	なぜ増えてきたのか是非教えてほしい。
事務局	昭和 53 年は、宝塚第一小校区だけではなく宝塚市全体が人口急増期で、末広小学校や川向に美座小学校ができた。1 年遅れか同じ年に光明小学校ができる等、昭和 43～45 年あたりが宝塚市で一番学校ができた年。そうした人口急増期に学校を増やしたのは宝塚市だけではない。社会的に学校を増やす必要があったが、校区によっては違う校区に行くことを、その地域性から地域の方に納得いただけなかったという実態がある。特に宝塚第一小学校の中州地域については、地域の寄付で学校施設の一部が建設されてきたということがあり、そもそも、その地域は中州あたりから住宅開発によって山手の

	方に広がっていったという経過も見れば、地域と学校の結びつきが非常に強い地域の 1 つであったため、昭和 53 年に意見書の提出があったと考えている。 その後何もしてこなかったというのは、第三次ベビーブームが来るという見込みがあれば、何らかの方策というのもあったが、昭和 50 年代の中盤から後半に向けて少子化が始まってきた。あとは子どもが減っていくという見込みの中で、学校規模をどうしていくのかということ。幼稚園に関しては、昭和 50 年代後半から統廃合が進んでおり、学校は小さくなるという考え方が主流になってきたことから着手しなかった。 ところが、今度は阪神淡路大震災と景気の後退があり、企業の持つ保養所が売却され、そこに住宅が集中するという、第一次ベビーブーム、第二次ベビーブームで経験しなかった別の要因でもって、子どもが増えてくるという想定外のことが起き、なかなか適切に対応がしきれなかった。そのため、今、様子を見ながら時期とともに検討しなければならないという状況に至ったというところ。対応はできていないが、時間的な経過の流れと全国的な子どもの増減、宝塚もそういう大きな波の中にあったということ。
委員	今の内容、社会情勢一般として非常によくわかる話だが、宝塚第一小学校の保護者として、そこは社会情勢の評論をされてもというところが 2 点ある。 1 つは阪神淡路大震災の後、緊急の課題になったのは住宅。被災後、住宅をできるだけ呼び込み、住宅開発をし、昔、温泉街があったところはマンション街になってしまった。その社会的要因がある中で、住宅が増えることが見込まれるにも関わらず、宝塚第一小学校を住民が増えるという方向で増築するということもなかった。住民から見ると、何もしていないのではと受け取られても仕方ないと思う。10,000 m²ある旧宝塚ホテル跡地に宝塚第二小学校つくったらどうかという話を半分以上本気で考えていた。逆瀬川駅から宝塚駅までの地域に対して、学校規模が全く足りていない現状を何年も前から認識していたと思う。その中で、学校を適正に保とうという行政の施策や考えはなかったのかということがとても悔やまれる。その地域の学校を、宝塚第一小学校だけでもたそうということ自体、考えが及ばなさすぎるのではないかな。もう 1 つ学校を作るなり、開発協力金を取って学校を作る原資に充てるとか、そういう議論も多分なかったと思うが、その辺りの見解とか、他のところの校地を取得して、国庫補助金を取ってでも新しい学校を作っていこうという考え方があったのかどうかというところ。もし、それが間に合わなかったのであれば、逆瀬川駅から宝塚駅までの地域に小学校が一つしかないの、開発抑制策はとれなかったのかということ。阪神間の他の諸都市を見ても、開発抑制策をとっているところはたくさんあるが、開発抑制策をなぜ取らなかったのか、これからその気があるのかどうか知りたいところだ。
事務局	震災後にここまで住宅開発が進むかどうかというのは、学校の校舎が 800 人ぐらいまでの受け入れ規模で建て替えられていることから、その段階では見込みが出来ていなかったと読み取れると思う。 そうした中で学校を作っていくということについて、10,000 m²というのは、広大な敷地ではあるが、学校規模によって多少面積が違うものの、宝塚の今の学校では 10,000 m²では十分な運動場や体育館、校舎を建てることができない。大体運動場が 7,000 m²ぐ

	らい、運動場と同じぐらいの面積があって校舎、体育館が建っていくので一般的には14,000㎡～16,000㎡ぐらい敷地が必要になる。そういう視点で見た時に宝塚市で学校を増設する場所がなかなか見当たらない。 また、仮に14,000～16,000㎡の土地があっても、この右岸側に学校は建設していなかったというのが当時の考え方。むしろ左岸側、武庫川の北側に1つの学校が必要だろうと検討されてきたというのが先輩から聞いた話。宝塚第一小学校区に学校建設という議論はなかったと聞いている。その背景は、そもそも宝塚第一小学校から分離開校した末広小学校にまだ余裕があったということ、右岸側全体で光明小学校の地域まで広げ、校区を越した広範囲なところで検討すると受け入れが可能だったということで、この右岸側の学校建設というプランが全くなかったと聞いている。 あと、開発協力金について、大規模な住宅開発があると学校建設も含めて開発業者をお願いし、建ったものを受け取り、分割して返していくというのが大体の住宅開発に伴う学校建設だが、こうしたマンション開発規模では、なかなか学校建設までを想定した開発協力金や、開発業者に対して学校建設を義務付けるところまでは難しい状況だったので、業者との関係性の中で学校建設が実現していかなかったというのが実態。 住宅開発を抑制していくかについては、今のところ抑制する方向での検討というのはないが、最終的には意見書としてまとめていく中に、市としても開発抑制について検討してくださいという意見書になると思うので、それは市の方で検討はされていくと思う。検討してもらえるように教育委員会としても要望はしていきたいと思う。
委員	行政職員同士なのに、要望というのは非常に市民的、アウトサイド的な言い方ではないか。
事務局	実際は一緒にやっていく。市長部局と教育委員会は、基本的に別組織であるため、形式上そう申し上げただけで、実行していく時には当然同じレベルで実行していく。
委員	その旗を振る気概を持っているかどうかということ。それと今の話について、議決にも諮って住宅開発に対して抑制をすとか、それともこの学校に子どもが集中しないように何か施策をとるべきだったと思う。
副委員長	前回質問した中で、市長部局、都市計画部局と教育委員会の会議はしたのか。その連絡が要請とかではなく、向き合っているのかというのを聞きたい。
事務局	具体的に担当課レベルという協議にはまだなっていない。私と開発関係の都市整備部長、企画部門とは協議をしている。方向性をまず決めていかないことには、担当課で具体のことを検討できないので、方向性を検討している。 ただ、その時に大きな課題になってくるのが、2040年には宝塚市の人口で65歳以上と生産年齢が1:1になってくるという点。若年層が転入してくるというツールを持っておかないといけないというところがあり、納税者としての若年層を取り込みたいという市全体の方向性がある中で、規制の在り方は大変重要になってくる。オーバーフロー

委員長	しないように、どう維持していくのかということも併せて、今意見交換をしているところ。 人口が増えすぎたのは市当局にも原因があると思う。この地域の人口密度を調べたら大阪市の人口集中地域と同じくらいになっている。だからこの状態からいかに増やさないかということを、教育委員会の問題ではなく、市の問題としてしっかりと部局と話をしてほしい。根本的には、13 年前に行財政改革推進委員会が出した答申の中で、小学校の規模問題というのは非常に大きな問題だと、これを是正しないとやはり教育についての大きな問題は解決できないという答申がはっきり出ている。やはりそれを無視していったという部局の罪は大きいと思う。なのでそこだけはしっかりと取り組んでもらいたい。こちらからもまた申し伝えるが。そうでないと校区変更の問題まで発展できないと思う。市民に負担を強いるということになると、市にも本気で取り組んでもらわないと、この問題は絶対に解決しないと思う。
副委員長	1 個だけ付け加えると、商業地域の特別用途地域化をしていくとか、文教地区にしていくとか、そういう網をかけてもらいたい。ラブホテルの前を通学路で歩いていく学校は異常で、何十年かほったらかしにされてきた。これも都市計画部局と企画部局と、それと市長の姿勢、しっかりと取り組んでもらいたい。 人口のことを言うのであれば、それこそ明石市は人口が増えた。それは、つまりこども政策にしっかりと取り組んだから、納税者が増えた。そういう町を作ろうということをして誰も反対しているわけではなく、学校も作らないといけないから増やしているの、それでいいのではと。シンプルな話題をしているだけで、そこにしっかりとした都市計画、特別用途地域でここに網をかけようとすれば、このような開発は進まなかった。特に都市計画の人に言っというてもらいたい。
副委員長	【3 議題】 次の議題の学校適正化の手法についてということで、よろしくお願いします。
事務局	この適正化の手法について、第一に「理想的な学校規模」という認識を一定合わせていった中で、今後、深く検討していく必要があると思う。いきなりこの宝塚第一小学校の校区を指して議論するのではなく、広く一般論として考えていきたいと思う。 時代の変化によって学校規模の考え方というのが変わってきている。昔は 50 人学級があって、過密な状態というのがごくごく普通だった。その後、第二次ベビーブーム、1 学年 6 クラス以上あるのが当たり前だと考えられてきた時代もあり、時代によって色々と考え方がある。また、それぞれの学校には地域とともに培ってきた歴史があるため、規模だけで判断すると、非常に危険な、困難な場合がある。 従って、まずここでは皆さんの認識を共有して共通認識を図っていったに進めていく必要があると思うので、まずは宝塚第一小学校に限定せずに皆さんの一般論として、学校規模、具体的な適正化の手法について考察していければと思っている。 そこで 1 つ目の学校規模の区分をどういう風にして考えていくのかというところだ

	が、適正規模を上回る規模は、一般的に何でもって判断していくのがいいと考えるのか、いくつかあると思う。まず、1 学年当たりの学級数で判断するという考え方。2 点目は全学年の学級数で判断する。全 30 学級が過大規模校だ、18 学級が適正規模校だとするのか、1 学年 3 あるいは 4、5 とするのかというところ。これは説明会でも色々と意見があって、学級数が多くてもよいではないかという方もいた。そういう視点で考えれば、保有教室数で考えていくのか。あるいは運動場、体育館面積等の施設全体で判断していくのか、他何か判断基準があるのか。これは今までの議論を 0 ベースにしてもらった中で、1 からご意見をもらえればと思う。
副委員長	配布された資料の 2 の 1 の (1) の①の (ア) ～ (エ) を言っているのか。何を問われているのか。
事務局	どういう視点で、判断基準で決めていくのかというところ。学級数というところに着目するのか、あるいは複合させて、学級数と施設面積でも。この会議の中で、皆さん方の考えを整理し、一致していこうということである。
委員	これは我々が意見を言うのか。
事務局	はい。
委員	我々がここで決められるものなのか。
事務局	決めるということではなく、認識をすり合わせていこうということ。これから学校規模の議論をする中で、宝塚第一小学校でということになると、色々な地域性とかも入ってきて、学校規模の議論がなかなか難しくなるので、いったん皆さんの中で物差しを作っていこうということ。ですから、何かで決定していくのではなくて、認識を合わせていきましょうということである。
委員	ということであれば、やはり現状保有教室数が全然足りない。さらに、情緒不安定な方についてのクールダウンできる場所が全くないというところもあるので、共通認識とするならば、保有教室数が一番妥当ではないかなと思う。
委員長	学校規模というのは、文科省の指針に出ている。適正規模校の 12 学級～24 学級というのが、国が定める規模ということになっているならば、我々市民から規模について議論するというのは少し違うと思うが、いかがか。
事務局	保護者説明会なりすると、この規模でいいのではという意見が出てくる。規模としてこれでいいという人もいれば、そうじゃないという人もいる以上、国の基準が仮にあったとしても、広く地域であったり、市民に問いかけてたりした時に、色々な感想があるので、一度、市が決めた基準や、文科省が決めた基準ではなく、本当に皆さんの中で何が

	正しい適正な基準なのか、学校像なのかといったところが必要ではないかと思う。この国の基準が適正な基準だというのも１つの解だとは思う。
委員	たぶん宝塚第一小学校の保護者はマヒしていると思う。実際、保護者にこの話が浸透する前は、何があかんの？って思っている保護者がほとんどだったので、それを基準に考えてしまうと少し違うと思う。単純に国の基準、市の基準でいいと思うが、どうか。
委員	(ア)～(エ)全部だと思う。まず、全体の学級数が31クラス以上は過大規模校だという厳然たる文部省の基準があって、31クラスをはるかに超えてしまっている。1学年も7クラスのところもある。あと、保有教室数、体育館面積、全部足りていない。これは、全部連関している話で、この中で何をもちてあなた方は基準と決めますかというのはおかしい。
事務局	基準を決めますか、ではなく、認識を合わせましょうということ。この会議を開いた時に、1・2回目の議論で、そもそも旧宝塚ホテル跡地にマンションが建とうが建つまいが、そもそも1,000人を超す規模がダメなんだという意見もあったり、増築できないのかという意見もあったり、増築の話が出るということは、人数が増えても受け入れていこうという、そんなお話があったと思う。実は、この委員の中でも大きく考え方が違っている。今回したかったのは、マンションの有無に関係なく、この学校規模はどうかというところの意識を合致していこうと。2回目まではそういう議論で、3回目は通学区域の弾力的運用に集中して議論をしたので、そうした議論はあまり出なかったが、この通学区域の弾力的運用後を検討するにあたって、1・2回目で出た意見のある程度合わせていかないといけないと思うので、意図的に規模ってどういうものだろうと見直していく時間を作りたかったというのが事務局の考えである。何か基準を決めていこうということではなく、皆さんの意識を1つにしていこう、方向性を1つにしていこうというのが目的ですので、それが進めば成果としては次の段階に行けるのかなと思っている。
委員長	保護者の皆さんは、全くそういうことに関心がなかった。しかし、今、やっと皆さんが、少しずつ、宝塚第一小学校が文科省の指針から大きく逸脱した規模で学校運営がされている、先生方が大変だということに気づき始めた。せっかくここまで来たのだから、12クラス～24クラスまでが正常な授業あるいは運動会、音楽会ができる規模ですよということを、もう一度皆さんに強く理解してもらおうと、そういうことをやっていくのがいいかと思うが、どうか。
事務局	それが出来たらいいが、ここでの議論を保護者や地域に説明した時に、そこがどの程度理解いただけるのかというのが、未知数だと思う。というのも、説明会時、「トイレの使用も一定制限がある。遊びだって、外で遊べるクラスと遊べないクラスがある。だから学校規模には課題があると思う。」というご意見の後に、「それは工夫の範囲ではないか」という意見があった。「休み時間も授業時間も学年によって始まる時間をずらせば、外で遊ぶ時間もずらすことができます。休憩時間を同じ時間にとろうとするからト

	イレが集中する。だからそれは工夫の範囲だ。」と。これも考え方で、それを私どもが否定することはできない。ですから、そういう方がいらっしゃるという中でいかに話を進めていくのかというのは、まずは原理原則を見ていき、総論というものを固めて、あとは各論に入っていくしかないのかなと思っている。総論という鎧を付けていくしかないと思って、こういう手法を今回提案したということ。これは 13 年前も同じようにいきなり各論に入っていくって失敗したというのがあるので、少し遠回りかもしれないが、理想的な学校というものを共通認識にして、それに宝塚第一小学校を当てはめていけばどうなるのかという、議論が必要ではないかと思っている。ですから、ここでの常識が一步出た時に常識と言い続けることができるのかどうか。そこが大きな課題と考えている。
委員長	規模というのは定員で、明らかに定員オーバーしている事態が十何年間続いている。この定員のことを議論するのには限界がきている。これをしないと子どもたちが適正な教育を受けられないようになってきているわけだから、定員という括りで皆さんに話をしたらどうか、育友会は。
委員	義務教育である以上、定員とかあなたダメですというのは、行政では多分言えないと思う。肢体不自由の人がここに通いたいと言ったら、通えるようにしないといけないと法律にも規定されているので、やはり受け入れありきで、増えていくこと前提に、ゆくゆくはこの次のステップを。保護者に違うところ行けますよってというのは苦肉の策と思うが、現状でも足りていないのだから、そこは今いる人のため、今いる人でもキャパオーバーなので、教室を増やすなどの対応が。
委員	(1) ①をここで決めてどうするのか。
事務局	ですから、決めるのではなく、認識を合わせていこうということ。理想的なものは何かというところの認識を合わせていき、増築という議論なのか、それとも校区変更という議論なのかを整理していく必要があるのではないかと思います。ですから、手法はこれでもなくでもいいと思う。ただこの中で認識を合わせていく必要があると感じているので、今回それを提案したかった。会長がおっしゃっている旧宝塚ホテル跡地のマンションの有無に関係なく、今のこの世帯数、子どもの数自体が課題だという考え方。あるいは増築というのは、今の規模を受け入れた上で、まだ宝塚第一小学校を巨大化してでも校区変更はせずに受け入れていくべきだという、全く反対の考え方がこの委員会の中である。
副委員長	誰もそんなことは言っていない。皆がずっと言っているのは、(ア)～(エ) 全てが基本認識の中にあり、でも時間軸があるという話。(ア)(イ)というのは、校区変更をするとか、校舎を新しく建てる等、しっかり是正しようと思えば、5 年 10 年かかるような仕事になる。今、委員が言ったのは、今の子をどうするのかということ、増築がいいとは言っていないが、あえて言ったら(ウ)を何とかしないと。もう 2 年後には、この学

	校に2クラス入れなくなるから。それを目の前に置いて、優先順位をつけろというから、彼は無理やり（ウ）と言ったと思う。この中から選べと言われると会議をやっている意味がなくなるというか、逆にその認識を変えてもらいたい。いきなり昨日今日で（ア）なんか出来ません、（イ）も出来ません、もしかしたら（ウ）は出来るかもしれない、時間軸の問題である。昨日今日やったことをあえて手をつけているわけではない。僕らは10年かけて先人が放ってきたことを何とかしようと思って集まっているということを認識してもらって、いやいや（ウ）を選んでくださいねと言われるのは、極めて安易な問いかけと思う。
事務局	この中で、選んでください・決めてくださいということではなく、認識を合わせていただきたというところからこういう手法をとった。要するに校区変更ということで具体的な検討を進めた方がいいということなのか、あるいはこの学校校区を維持したまま、何らかの方策を検討すべきだと、この会議で結論付ける方向性とするのかによって、これからの進み方が全然違ってくるので、その整理が必要ではないかと思っている。
委員	だから文科省は、過大規模校であっても増改築を認める国庫補助金を出そうとしているのではないか。本当は校区変更とか考えていくべきでしょうけど、地域特性によって校区変更ができないとか様々な理由があるので、20世紀中は、過大規模校の増改築を頑として受け入れられなかったとしても、21世紀になって文科省が補助金交付に舵を切ったのは、なかなか決めた通りに行かないと国も認識したのではないか。短期的には（ウ）がいいのかは別として、今の子どもたち、来年再来年入ってくる子どもたちのことを考えると、ただでさえ教室が足りていない、必要な設備が足りていない、トイレも自由にいけないということも含めてというのであれば、増改築するしかないのではないか。文科省に宝塚市職員が出向いて詳細に地域の事情を説明し、相手と膝をつめた話し合いを実際にできるかどうかということだと思う。
委員	仮に校区変更を何年後かにしたとしても、限定的だと思う。本当に宝塚第一小学校に入りたいという人は、この校区に引っ越してくると思うので、やはり私は増改築するしかないと思っている。
委員	子どもたちの姿を見ている中で、社会の状況から考えると、特別支援学級のお子さんではなく、通常級に通っているが、何らかの障害がある子に通級指導や別室指導を進めていきなさい等、特別支援教室の充実へとニーズが変わってきており、多岐にわたって課題を持っているお子さんに対してしっかりとケアをしていくということがある。後は、専科制。今、算数や理科とか、子どもに専門的なことをしっかり伝えていくことが必要だという。社会状況に応じて、教育も変わってきているので、この前の説明会でご意見をいただき、考えていかないといけないと思ったのは、学校の工夫をもっとしろというところで、何か他にできるのではないかと考えたが、例えば、時間割や時程を変えていくとかした時に、やはり縦割り活動を学校でやっているということ。そうすると、休み時間が学年によって違うことで、いわゆる教育内容とか学校が大事にしていること

	を変えていかないといけないところが出てくる。それから、通学路のことを考えると、1時間かけて帰る子もいる中で、下校時間をずらして、遅い時間まで子どもを引っ張ることができないというところを考えていくと、なかなか難しいところがあるが、でも何か工夫ができないかなというのが現状である。 だから、結論から言うと（ア）～（エ）の全てというのと、近々で言えば保有教室、運動場の施設面のことを変えていただくことがよいかなと思う。思うところは色々あるが、事務局が言うようにここで何とかということもあると思うが、学校ももっと工夫できないのかというところについては、真摯に受け止めたいと思っている。ただ、そういう意見をいただくが、どうしても一方通行で、難しいということを伝える場がなかなかないというのが現実で、厳しいと思っている。
委員	ここはもう過大規模校で、地域の情勢を見ると、例えば、5年～10年を目途に大規模校を維持し、その先はまた話しましょうということに、仮に決めたとすれば、大規模校で維持するために設備的にどうするとか、あるいは校区の一部変更で対応すると大規模校で維持できるとか、目標さえはっきりすれば、施策も色々あると思う。だから、大規模校で目標決めて何年間かで皆さんで議論をし、考えを出しませんかというなら、それはそれで我慢できる人もいるのではないかと。例えば、6年間子どもが宝塚第一小学校に行かずによそで我慢するが、7年目からは次男は行けるとか次女は行けるとか、6年過ぎる時にもう一度検討しましょうとかにしておけば、頑張りようがあるのではないかなと思うが。
事務局	それは時限的に校区変更ということか。
委員	目途さえ作れば考えもあると思う。でも、目途がないから、喫緊のこの1年2年どうしようかとなる。
副委員長	この後の（2）（3）をどうするか。今日話を聞いていると、ここのメンバーもフレキシブルに考えようとしている。今日の議論で1つの答えを出すのであれば、フレキシブルな選択を時間軸で考えるというのが、この委員会の結論になると思うが、それでよろしいか。事務局的にはどれか選んでほしいと思ったかもしれないが。
事務局	選んでください、決めてくださいとかではなく、認識をとということです。ただ、少しは認識が一致してきているのではないかなと思っている。増築なのかそもそも論の話なのかという、そこの整理はまだできていないが、次回以降で議論が出来たらいいのかなと思う。後、途中、経過段階で地域あるいは保護者への説明も必要になってくると思う。この進路が正しいのかどうかということも含めて、確認が必要になってくると思うので、もう一回会議を開いた後ぐらいに、保護者説明会や地域説明会を開催するのはいいかがか。説明はこちらでしますが。
副委員長	それは何の説明か。このこと、それとも前半に話したことか。前半に話していたこと

	はしっかりとアンケートを取って検証結果を出してという話だったが。
事務局	校区変更なり学校規模の適正化についての進捗状況、検討状況等を説明し、保護者のご意見の聴取の機会というのは必要ではないか。
委員長	これだけ早く校区変更の話が出てくるのは少し戸惑うと思う。今回で第4回目だが、問題を提起してから選択制の話が出て、保護者の皆さんに説明をし、今度の新1年生に手を挙げてもらう。段階を経てきている。だから、これによってひょっとしたら、選択制に動いても違った意味で数字が出てくるかもしれないということ。拙速にやるのではなく、その部分について注視しながら進めていくのがどうかと思うが。 住民への説明会も大事だが、まず保護者の皆さんに今の状況を理解していただくということ、それで学校の先生方の苦勞あるいは問題点、弊害、色々なことを理解していただくこと、そういうことを含めて、この議論を深めていったらいいと思う。
事務局	地域はいいとしても、保護者というのはどういう手法で。
委員長	現在、選択制の話を進めているが、今の状況を皆さんが完全に理解しているわけではない。保護者説明会の参加人数をみても非常に少なかった。これをもう少しレベルを上げていくという努力が必要と思うが、どうか。
事務局	それは、説明会をしてということではなく、ネットか何かで。
委員長	我々の活動の中でも、ネットというのは少しあれかもしれないが。
事務局	通知、お手紙か何かか。対面やネットでなければ、その他の方法はどういう手法で、保護者の方にこの問題提起をするのか。
委員長	次から次へと説明会を開くのではなく、もう少し時間をおいて進めていこうということである。13年間、この問題が続いており、すぐに問題解決するとは、私たちも思っていない。
事務局	そういうことであればいいが、弾力的運用でこれからは校区の変更も含めて検討していくというような、僅かだが、アナウンスもされているので、その間の経過・進展が分からない方からすると、次に説明会をできるのはおそらく2月とかになると思うので、その半年間というのをどう捉えられるかというのがある。これもやりましょうということではなく、そういう方法もあるが、ここは皆さん方、地元の空気の中で、あれから話がないが、どうなっているんだろうなということがあれば、一定の説明は必要だろうし、あれから特に何もないのであれば少し時間をかけてもいいでしょうから、その辺の匙加減というものがどうなのかをご意見聞きながら、もう一度、二度会議してから説明会についての検討をすればいいのかなと思う。

副委員長	校区変更に関しての保護者アンケート的な説明会はもう一度、二度会議をしてからで、拙速にはしないということでもいいか。
事務局	もう一度、会議で意見をやり取りした後ぐらいに、進捗も含めて一定の説明が必要なのか、もしくは、もう一つ先になるのかという議論ではないかと思う。
委員	今言っている校区変更というのは、校区の弾力的運用で、完全に切り離すという意味ではないということか。
事務局	いや、校区変更も含めて地域の方に、あとは増築ということも。
委員	弾力的ではなくなったのか。
事務局	弾力的については一定議論は終わったが。
委員	線引きをするということか。校区変更という言葉の意味を知りたい。
副委員長	今、事務局が言っている校区変更は、線引きまで入っている認識でよいか。
事務局	はい、線引きをするかどうかは別として、校区変更というのは一定地域を別の学校に持っていくということになる。
委員	選択制ではない？
副委員長	もう選択制になっている。
事務局	地域を指定せずに、宝塚第一小学校区全ての地域をもって選択制になっている。
委員	前から選択制か。
事務局	今回から。
委員	今回からで。だから、選択制と校区変更とは全然違う。
事務局	選択制についてはこの1・2週間ぐらいの間に全保護者にお手紙を出すということになる。
副委員長	微妙な6人という数字で、7・8人だったら1クラスなくなるということがベースにある。37人となると2クラスになって、そこを頑張ってもらいたい。教育委員会がそういう形をしっかりと向き合っているかということ。今の方々に末広小のいいところとか

	を、しっかりとアナウンスするとか。この前、宝塚第一小学校の役員会に出席した時に、旧宝塚ホテル跡地のマンションに入る方々に選択してもらえるように、教育委員会がアナウンスをしてくれるのか、選択制を作ったのだから、それをしっかりとやってくれというのが、1 役員からすごい出た。今日の会議に欠席されているので、僕が代弁している。会長も言われたように、今できたことの成果を僕らが共有し、教育委員会がそれをきっちりと保護者とかに向き合ってもらいたい。 今日の会議では（ア）～（エ）に優先順位をつけて認識を作ることはできなかったが、（ウ）に関しては、皆で協議の範囲であるということが、話できたということによろしいか。
事務局	はい。とにかく校区変更というよりも、キャパを増やして受け入れていった方がということ。校区変更がなかなか難しいという認識でよいかな。
委員	少しそこは引っかかるので、ご案内はしてもらって構わないが、弾力性の運用に関して、保護者に決して誘導はしないでもらいたい。
事務局	もちろんである。
委員	誘導されると、ここの学校区に住んでいるのに、通学のことを含めて不利益を被ることになる。行政が誘導するのはおかしいと思う。行政はそれをやったらだめだと思う。
委員長	そもそも校区変更という言葉が出てくると自体が時期尚早だと思う。今まで十何年間、その言葉を出さずにきており、地域はアレルギーになっているわけだから。むしろ今の選択制の結果を見て、次のステップに進むという形で進めた方がいいと思う。 もう一つは、市の部当局の覚悟があるかどうか。学校問題というのは、地域で決めるものとおっしゃっているが、他の自治体では、市民の意見を聞きながら全部市が決めている。宝塚の場合は小さい小学校と大きい小学校がバラバラになっているという事態を考えると、それは市民だけの力では無理。
副委員長	今の委員長の言葉が結論ということで。
委員	次回の予定だけ言ってもらいたい。大体何月ぐらい。
事務局	12 月ぐらいで開催しようと思う。
副委員長	では、ありがとうございました。